

**2015年4月27日 日本テレビ 定例記者会見****《 要旨 》****<発表>****・「7daysTV かぞくって、なんだ。」**

5月9日（土）から5月15日（金）までの7日間、「7daysTV かぞくって、なんだ。」というキャンペーンを展開する。期間中、様々な番組の中で家族について取り上げていく。

**1. 視聴率動向と編成戦略****・視聴率データ**

先週は視聴率三冠王を獲得した。年間で15回目、13週連続での獲得となった。13週連続は、当社の歴史の中では初めての記録となる。これまでの最高は、1997年4月の第1週からと、2000年1月第1週からの12週連続だった。

**・4月期改編**

4月期から、日曜にドラマ枠を新設し、ドラマを3枠にしたが、今のところ好調なスタートを切れたと考えている。水曜ドラマ「Dr. 倫太郎」は、各局のドラマの中で上位に入っており、土曜ドラマ「ドS刑事」も3回目の放送で視聴率を10%超に戻し、日曜ドラマ「ワイルド・ヒーローズ」も午後10時30分という時間帯にありながら、2回目で10.2%を獲得した。この後も視聴率を積み上げていくことと、「Hulu」等でのネット配信部門での吸引力になってくれることを期待している。

バラエティーは、新番組「マツコとマツコ」が土曜の午後11時という枠で放送を開始したが、この時間帯でも視聴率が10%に届くかというところにあり、順調にスタートしている。

平日の朝から夕方にかけては、「Oha!4 NEWS LIVE」から「news every.」まで生の帯番組を放送しているが、前の番組から次の番組へ良い渡し方をしていくことが重要だと考えている。例えば、「ミヤネ屋」は読売テレビが制作しているので、当社がやるべきことは、「ヒルナンデス！」から良い状態で「ミヤネ屋」に渡すことであり、「ミヤネ屋」から「news

every.」に良い状態でもらうことである。このように、縦の流れを重要視している。

## **2. 営業状況**

### **・放送収入**

3 月は、タイムセールス、スポットセールス共に前年同月を上回ることができた。2014 年度の通期においても、タイム、スポット共に前年度を上回ることができた。視聴率が向上したことに追いつくような形で放送収入も伸びてきたという 1 年だった。

2015 年度 4 月期のレギュラー番組も好調で、スポンサーの皆さんにも支持いただいている。しかし、スポットの市況は必ずしも前年を上回るような状況にはなく、もう少し全体的に景気が好転し、市況も改善することを期待している。

### **・放送外収入**

映画は、当社の幹事作品である「寄生獣 完結編」が 4 月 25 日に公開され、土日の 2 日間で 20 万人の観客動員を実現することができた。

また、3 月 14 日公開の「風に立つライオン」は、これまでに 90 万人を超える方々にご覧いただいた。

恒例となっているミュージカル「アニー」は、今年から会場を東京・渋谷区の新国立劇場へと移したが、4 月 25 日からスタートし、大変好調である。

2 月 21 日から開催している「ルーヴル美術館展 日常を描く—風俗画に見るヨーロッパ絵画の真髄」の総入場者数は 35 万人を超えたところである。6 月 1 日まで開催するが、これからゴールデンウィークに入るので、さらに入場者が増えることを期待している。

海外ビジネスでは、ソニー・ピクチャーズ・テレビジョン・ネットワーク（SPT）と合弁会社を設立して、新チャンネル「<sup>ジェム</sup>GEMアジア」を開局し、東南アジアでの有料放送事業を行うこととなった。SPT 自身が、現在、韓国のドラマを中心に展開しているチャンネルがあるが、当社としては、こうした現地での成功実績のある SPT をパートナーとし、現在東南アジアで見られているアジア・コンテンツに日本のソフトを付加することで、日本コンテンツの市場をさらに大きくしていきたいと思っている。今はこの新チャンネルの開局準備を行う合弁会社を作る段階であり、夏以降、チャンネルを立ち上げたいと考えている。

### **3. その他**

#### **・ Hulu**

Hulu には、現在 105 万人前後の有料会員がいるが、これからもさらに会員数を増やして、事業規模を拡大していきたいと思っている。放送との関係では、リアルタイムで番組を見ていただいている現在の地上波、衛星波の放送と、Hulu のようにオンデマンドでご覧いただく動画配信は両立していくものだと考えている。動画配信の事業分野は、これからもさらに活性化していくと予想しているし、またそれを期待している。出来るだけ多くの優良コンテンツを集めて会員の皆様に提供していきたいと考えている。

#### **・ 週刊誌報道について**

当社の上重聡アナウンサーが担当番組の中で謝罪した件は、個人的な交友関係の中での出来事とはいえ、様々な点で疑念を抱かれるような結果を招き、アナウンサーとして自覚に欠けていたと言うしかない。嚴重に注意をし、当人も深く反省している。

今後は、業務上はもちろん私生活においても、社会人として、放送人として、自覚を持った振る舞いをしてもらいたいと思っている。これを糧として、視聴者の皆様に信頼されるアナウンサーに成長していった欲しい。

「週刊文春」が掲載した松坂大輔さんから上重聡アナウンサーがもらったとされるボールの件は、これまでの調査では、そのような事実はなかったとの報告を受けている。事実無根であり、「週刊文春」に対しては抗議を行い、法的措置の作業を進めているところである。

#### **・ 自民党によるテレビ局への聴取**

実際にどのようなやりとりがあったのかは聞いていないが、政権与党が個別の番組の内容についてテレビ局の幹部を呼んでヒヤリングしたということは極めて異例なことだと思っている。テレビへの圧力との疑念を持たれかねないという新聞各紙の指摘は、まったく自然な指摘だと考えている。当社に関して言えば、このようなことがあったとしても、どのようなことを言われようとも、それを圧力だと受け止めて自分たちが萎縮するようなことはない。

適正な番組を作るということは、放送界の自主的な努力に委ねられているものであると思っている。もし番組の内容に問題があれば、BPO が調査して見解や勧告を出すことになる

ており、現在の BPO は十分に機能していると考えている。

**【出席者】**

大久保好男 代表取締役 社長執行役員

小杉善信 取締役 専務執行役員

丸山公夫 取締役 常務執行役員

(了)